第五章　流れる歳月

一、家の建て替え

亡くなった祖父磯太郎の「家のことよりも農地を増やすこと」という方針を守って暮らし、また父の静男も早くに亡くなったので、我が家は建て替え時期を逸し、傷みがきていた。近くの大工・大小屋一郎さんが居るのでお願いし、蔵と長屋をそのまま残し、母屋のみ建て替えることにした。昭和三十七年のことである。

と言っても、当時、家を建てるということは、今のように住宅メーカーが一括して請け負ってくれるのではなく、施主が、図面から建築資材の調達、水回り、配電等の施工管理をした上で、大工や職人の手配、またそれぞれの日当の支払いまですべてを管理するやり方だった。立て替えが決まると、前の年から建て前まで、材は大古屋裏の持ち山から千広さん、今朝治さんに伐ってもらい、時又の丸十製材所で製材してもらうとともに、別に柱

家の建て替え作業

材の檜を三十本程求めて用意した。そしていよいよ昭和三十七年夏、古い家を取り壊し、一部二階建て三十坪程の現在の家を建てることになった。

南原区農業構造改善補助事業（事業費の一割が地元負担）で、ようやく主たる道三路線を車の通行できる道幅に改良する問題が持ち上がっている頃だったので、当然、我が家を含めこの洞の方への道はまだ車が通行できる幅ではなかった。建築資材一切が坂下の青島商店前へ下ろされた。その後は、坂上の我が家まで全部人力で坂を上がり下りして運んだ。当時は元請がいるわけではなく、基礎工事の人、大工、左官……、それぞれの職人がそれぞれの施工を受けてくれての面倒な勘定だったが、自分たちで運べばそれだけ手間賃が差し引かれたので、わたしも一生懸命運び上げた。当時は、米一俵は平気で背負うことができる程、若く元気であったし、長男も小学校一年生になっていて幼いながら手伝ってくれた。

二、流れる月日

その頃から、近所の女性たちも「蚕など飼っているより会社勤めの方が収入になるから」と会社勤めに出るようになっていた。農地改革後、農地として貸していた近くの田や畑は、そんな風潮の中で殆ど手入れされなくなり荒地として次第に返却されてくるように

なった。そんな中で昭和四十三年には、早くに夫に先立たれ、明治の嫁として感情を押し殺し、働き続けて家を守って来てくれた祖母が九十三歳で亡くなった。気がつけばわたしもすでに三十三、女の厄年を越える年齢になっていた。

二人の子どもも成長し、教育費が嵩むようになったので、昭和四十九年から昭和五十三年まで下久堅農協（合併して飯田市農協）へ勤めさせていただいた。始めはえのき茸選果場の事務、それから生活センターレジ係、続いて近隣七農協が合併するとその事務、合併後は竜丘本所企画管理課の雑用などが、主な仕事だった。

昭和五十四年から五十五年の一年間、労働省より予算が来て職業に復帰させるための事業があって、わたしも失業保険をいただきながら桜町の高等職業訓練校和裁科で学ばせていただき、続いて、もう一年は教えていただいた秋竹先生の飯田の丸山町のご自宅で生徒さんたち二十名程の中で学んだ。子どもたちもそれぞれ手を離れ、一人前として巣立っていった。

昭和六十二年から二年間、下久堅婦人会長の役が廻って来た。婦人会は、戦中は国防婦人会として大切な役目があり、戦後も、女性は結婚すると即婦人会員となり文化的な活動をするための組織として続いていた。わたしには重荷であったがやむなくお引き受けしたが、当時は公民館活動が盛んになり、婦人が家に閉じこもらず車で活動するようになって

いた。人それぞれ価値観も異なり、趣味を同じくする人たちの集りができたりしていたので、婦人会としての活動目的が薄らぎ、会をやめる人たちが多くなって悩んだ記憶がある。その頃になると、わたし自身も「友の会」への出席も怠り勝ちになったので遂に退会した。続いて平成五、六年は日赤奉仕団下久堅分団長、平成十、十一年社会福祉協議会委員などを務めさせていただき、美術博物館の自然講座などにもよく出席した。この間、母が老衰で平成七年に九十歳で亡くなった。

平成十年頃だったか、婦人会がいよいよなくなるという頃に、婦人会の機関誌『ちぐさ』が発刊四十号を迎えた。そこに寄稿した一文がある。

「ちぐさ」を通して婦人会を考える

ちぐさ発刊四十号おめでとうございます。創刊以来休むことなく発刊し続けて来られたことは、皆の協力の賜物であり、その一冊一冊は、下久堅に住む婦人の尊い歴史でもあると思います。

婦人会は公民館活動の一翼も担い、大切な学習の場として永く続いて来ました。その中に家庭にある婦人が勤めに出るようになり、活動の場も広がって、婦人会に対する考えもだんだん変わって来ました。

そんな流れの中で、わたしは昭和六十二、三年と会長のお役をさせていただきま

婦人会の旅行（昭和63年８月　恵林寺）

した。任期中に婦人会をやめたいという声が時々聞かれるようになり、南原では多くの人たちが会から離れました。やはり力足りない者が先頭に立たせていただいたために……とわたしはとても残念な思いをしました。

婦人会はどんな活動をすれば会の存在意味があり、会員の所属意識が自覚されるのだろうか、ということが絶えず頭の中にありました。当時のわたしは、前会長さんに教えていただき、また役員の協力を得ながら前年度に添った学習会や、行事を進めて行くのが精一杯でした。そんな中、文化部の方たちが中心になり、皆さんの大変な協力で出来上がった「ちぐさ三十号の記念特集号」が手元に残りました。

その号の中で、斉藤俊江さんが「ちぐさに見る婦人の希い」と題して一号から十号までを読まれての感想を寄せて下さってあります。

下久堅に住む婦人がどんな思いで固い土を耕し、三世代時には四世代の人間関係のある中で頑張って子育てをし、年に何回か飯田の町へ出ることをどんなに楽しみにしていたか等々…。その時々の世相、時代背景を重ね併せて書かれてあります。

この文章を読みました時、婦人会の中で積み上げて来た今までの「ちぐさ」の読み合わせをして、皆で話し合えたらと思いました。そうすることで、少しでも今の婦人会のあり方というものが見えてくるのではないでしょうか。

「ちぐさ」に記されたこの地に住む婦人の、どんな細やかな思いや希いであっても、それを受け止めて共感したり、その中にある問題を考え合い、そこから更に一歩進めて婦人会が纏まって行動に繋げて行く会であればと今思うのです。

この四十号発刊の節目に、会員がお茶でも飲みながら「ちぐさ」の読書会が出来たらどんなに素晴らしいかと思っています。

下久堅にとって「婦人会とちぐさ」を何時までも大切に守り続けてゆきたいと願っています。

三、洞の稲作

わたしはあれこれと勉強しても長続きもしなかった。ただ一つ、娘時代から大切にしてきたのは女所帯の時が長かった「堤屋宮川家」を次代に繋ぐべく、周囲の土地管理をなに

よりも先に立てて考え行動することだったような気がする。そんな中で、想い出すことを書きつづっておくことにする。

この洞の水田は上の大小屋と我が家だけだったので、水田の水は前山の方から出る清水で賄えた。養蚕がよい時代は桑畑だったというのを、昭和の初めに田に直し、上の方の田は下に石垣を積み、きちんとしてくれてあった。三十俵程穫れる田の下半分は、我が家の仕事に来てくれる千広さんに貸してあった。

昭和三十七年の農業構造改善事業で、この洞も道を広くすることになり、拡げた道の分だけ耕地は潰れた。千広さんは一生懸命耕していたので大変悲しがったけれども、わたしは車が通れるようになり、うれしいと思った。受益者ということで、大古屋、大小屋、堤屋はたくさんお金を出した。その道づくりの作業は、業者が受けてはくれたが、集落の手伝える人は作業を応援したので、わたしも土方仕事を手伝った。

田づくりの作業はまず崩れている土手があれば直し、土手を叩いて固くする。その後、一鍬一鍬耕起し、水を受け、土を細く小切って平らに直し、一苗ひと苗、手で植えた。そして何回も田の草とり（除草作業）をした。暑い時期の田の草とり程厭な仕事はなかった。祖母が頬かむりをして頑張っていてくれたことも想い出す。収穫もやはり手で刈り、

稲架掛(はざが)けにし、足踏みの稲こき機で籾(もみ)にして、集落共同の籾すり機で米にしてもらった。

そのうち周囲では植付けも収穫も順に機械化されて、手間が省けるようになっていった。地域のあちこちに工場が建てられ、農業より会社勤めの方が収入になり、昭和四十年代になると廻りの女性も殆ど勤めに出るようになった。けれども、わたしは勤めに行かないのだし、高価な機械を買う程の面積ではないしと、米作りをやめる平成十四年まで、田植えも稲刈りも手作業でやった。作業機械の速さに負けないようにと、田植えなども一人で朝薄暗い中から始め、手早く植え、稲刈りも刈って縛って稲架掛けをして、一人で一日四畝(せ)を仕上げるなど無理なことをして来た。主人が退職後には手伝ってもらい、二人で手でやり続けた。それでも、平成になる頃には、稲刈りは一条刈りの稲刈り機、稲扱きは稲架に添って扱いていくハーベスターを使い、籾すりは農協のライスセンターでしてもらうようになった。

四、養蚕のこと

下久堅は養蚕と紙漉きが盛んで、殆どの家が紙を漉いていたが、我が家は紙漉きはしなかった。養蚕も担い手は祖母と母二人なので、千広さんに手伝ってもらうと言っても桑は我が家の廻りの坂畑から採るだけで、母の楽しみに、わずかを、二階の蚕室で飼う程度だ

った。掃き立てより二齢までは農協で共同飼育、三齢より配蚕され、各家で繭になるまで飼育した。父が健在の頃、石灰育という方法で丁寧に飼育したとかで、皆は一日三回の給桑でよいというのに、母は丁寧に日に四回桑を与えた。蚕は温度の虫で、ある程度の室温を保つのが普通なのに、母は低い温度で飼ったので、近所ではもう上簇（じょうぞく）が始まるというのに、家では蚕がまだ桑を食べており、二日程遅れての上簇で余分に骨が折れた。でも桑を余分に食べ大きくなり、したがって繭も大きなものができ、母は自慢だった。蚕室が二階だったので階段の上がり下りが大変だった。主人の実家ではお座敷までも目棚（めだな）を立てたくさん飼っていたので、主人は「ここ（宮川の家）は皇居の御養蚕所のようなものだ」と言っていた。

養蚕も次第に手間を省いた飼育、上簇に改良されて行ったが、我が家は昭和四十二年に飼うのを止めるまで昔通り二階で骨の折れる飼い方をした。

五、前山の植林

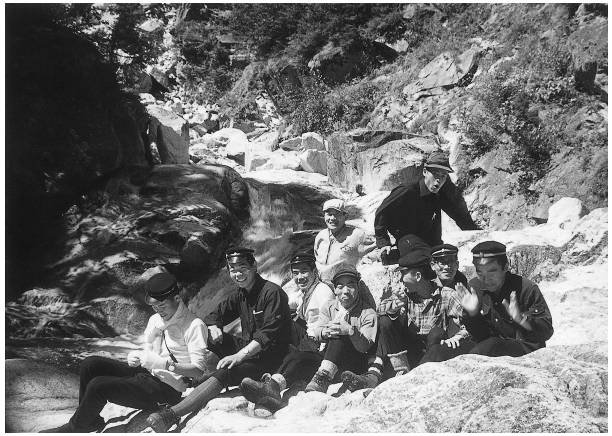
稲葉集落境やイタチヶ沢辺りに我が家の山林があり、父が病床にある頃には父と同年で親しくしている徳次郎さんが山の管理をしていてくれた。松山の松茸を売ってくれたりしていたこともあったが、今では地図を見ても境は分らない。

家前の雑木山には山栗の木がたくさんあったが、栗玉蜂がつくようになったために伐採し、丁度その頃、飯伊で一番早く下久堅農協で有線放送を取り入れることになったので、その電柱に使ってもらうようにたくさんの木を供出した。昭和三十年頃のことである。

当時、里山も植林植林と檜を植える時代で、我が家も残った雑木は全部伐り、檜苗を植えた。幼木のうち十年程は夏になると一週間かけて千広さんと下草刈りをして育てた。近所の平垣外の小父さんが「手入れをするで直（じき）に一〇〇万円になりますヨ」と言ってくれたが、時代が変わり、売れるどころではなく、順に手間をかけ間伐したりしたので、かえって手入れに一〇〇万円程かかってしまった。

そのうち里山の植林は根が浅く強い風には弱いし、良い材はできないのだと言われるようになった。主人が下久堅財産区の係をしている時、各集落の係夫婦二十名程で関ヶ原インターチェンジ近くの今須林業というところの平らな山林を見学したが、確かにそこの山の木は一〇〇年経った木でも下から上まで太さが同じで真直ぐなのに吃驚（びっくり）、家へ帰って前山の木を見たら根元は太くても上の方は細く、真直ぐな木は殆どなく、なるほどこんなところのものは駄目だと思った。

今ではあの雑木林の里山は尊く、あのままにしておけば春は檀香梅（ダンコウバイ）の黄の花が咲き、山桜も咲き、山樫にはどんぐりが成り、秋にはもみじが紅葉したのにと悔まれる。


山岳部の顧問として

六、夫・明さんのこと

大学卒業後すぐ教員に採用され、結婚当時は最初の赴任校上郷の高陵中学校にいて、続いて緑ケ丘中学龍丘部校、下伊那農業高校、阿智高校、長姫高校定時制、飯田高校と、自宅に近いところの学校へ勤めさせていただけ、大変ありがたいことだった。

新卒で赴任した高陵中学校は座光寺、上郷の組合立として開校したばかりで、先生も生徒も張り切っていたと話していた。その後、中学校より高校への勤務となり、初めての農業高校では体育のクラブを受け持たなくてはならず、何も特技がないが、山登りならと山岳部の顧問をさせていただいた。赤石山系の山々は宮川家の山の境より詳しいと言える程、生徒さんたちと何回も登り、元旦登山といって西駒ヶ岳の山小屋で越年したことも何回かあった。

阿智高校では生徒さんたちの暴力事件があり、朝まで職員会議をしたこともあった。退学させて社会に出せばその子が良くなる訳でもないとか、悩んでいた姿を思い出す。事件は結局クラスで一人退学生を出したが、「一人ひとりは良い子なのだが集団になると豹変するのだ」と言っていた。退学後も、その生徒さんの就職先へ訪ねたり心配していたためか、その生徒さんは結婚してからも家へ何度も主人を訪ねてくれた。飯田高校勤務時代には、進学をめざす生徒の日々の授業の下調べや準備で四苦八苦しているとき、原水爆禁止運動の飯伊地域の先立ちをさせられ、とても大変のようだった。

在職したどの学校の卒業生もよく家へ訪ねてくれた。殊に最初の赴任校高陵中学で担任をしたクラス「追懐」の生徒さんたちの旅行には何度も連れて行ってもらっていたようだった。また、そのクラスではないが、同級会に招かれた後、幹事役の方に出したのだろう御礼状の下書き（原文は四百字詰め原稿用紙に横書き）が出てきた。

3年4組の皆さんへ

45年間の空白を埋めた夢のような集いから、再び現実の生活に戻り甲斐甲斐しく活動されていることと存じます。しかし時折、休憩時間にあるいは台所で野菜を刻みながら、同級会のことが思い浮かんできて、懐かしさに耽ったり、語り尽くせなかったこと、触れ合いきれなかったこと、など多少の心残りを感じたりしているのではないだろうか、などと推察しています。

さてこの会に招いて下さったこと改めてお礼を申し上げ、計画を立て、お世話下さった幹事の皆さんに感謝申し上げます。

遠方から心弾ませて集ってこられた方々は、生れ在所に立ち寄られ、かつての周辺の風景などを思いおこされて、帰って行かれたでしょうか。

45年前、校舎の立つ丘から下段を見おろすと、南条飯沼から座光寺河原にかけて、夕陽にその影を長く落としているのが印象的でした。

湯が洞のロビーで、既に集っておられた皆さんの前に立った時、少年少女であった当時のイメージを重ねられる方はごく僅かで、別の団体の方も混っているのではないかと戸惑いましたが、やがて大部屋に入ってお茶を頂きながら、近況自己紹介を聴いているうちに、だれも45年前の面影を目元に残していて、納得し、気持ちが落ちついてきました。

再会の喜び感動が大きくて、今日までの生活の積み重ねの重さは忘れての自己紹介でしたが、それぞれに苦労をし、今日より更によい明日を願い信じて頑張ってこられたのだと思いながら聴いていました。

45年は長い年月でした。

他方みんな60才になったと言っていましたが、とても60才には見えませんでした。女性の方々は、これから結婚するのに十分な程若々しく、皆さんは40才台でした。

祝宴に入り、皆さんがより元気よくなる頃には、高陵中学での生活がついこの間のことのように近づいて来て、半世紀近い年月の経過を実感し得ないのでした。私は菩提寺の用事のため一足先に失礼しましたが、皆さんのお別れは如何だったでしょうか。有り触れた言葉ですが、3年4組の皆さんが、いつまでも健康で幸せな日々を送られるようにと心から念じています。

思うまま心の一端を記して感謝の言葉とします。

律儀な夫らしい文面の紙背に、夫の教師としての喜びが感じられる。

子どもたちが好きな人であった。教え子との交流はもちろん、自分の子どもたちとも、またその友だちも一緒に、折にふれ、サッカー観戦や赤石山系の夏山登山など、若い人と一緒に行動するのを楽しみにしていた。夏休みなど、二人の子どもの孫たち四人が来ると、トラックでジダジダ峠方面へ連れて行ったり、近場にあるあちこちの公園や遊園地に連れて行って懇ろ(ねんご)に遊ばせていた。また、退職後は、出費ばかり嵩む今まで放ってあった土地の管理に精を出してくれ、そればかりか何度もわたしを外国旅行に連れて行ってくれ、多くの思い出を残してくれた優しい人だった。

勤めている間は健康であったが、退職後は病気や怪我が続き、飯田病院へお世話になった。七十歳頃から難病の潰瘍性大腸炎となり根絶治療が無いので投薬を続け、その間チェンソーで足を怪我したり、耕耘機に挟まれたりで入院もし、平成十四年には前立腺ガンが見つかり東京で放射線治療を試みたり、その後も、膀胱腫瘍、間質性肺炎など病み続け、だんだん無理が出来なくなり、二十年八月最後の入院、九月二十三日夜、呼吸が旧に苦しくなって、その夜遅く遂に亡くなってしまった。主治医の原繁樹先生は立ち合って下さり、わたしと娘は見送ることができたが、駆けつけた息子家族は間に合わなかった。

生前「戒名もお経も要らぬ」と言い残していた故人の遺志にしたがって、葬儀は「お別れ会」形式で行った。唱歌が大変好きだったので、文部省推選というような歌を会葬して下さった大勢の皆さんに歌っていただいた。我が家の上の柗井きみ子さんがコカリナを吹いて下さり、関靖さんもアコーディオンを奏でて下さる中、高陵中学校での教え子の皆さんが大勢参列下さって校歌なども歌ってくださった。またお別れの言葉を同僚であった先生、高陵中学「追懐」級の代表金森さんからいただき、四人の孫たちも涙ながらに述べることができ、心に残るお別れ会だった。

第六章　旅の日記

ヨーロッパ二十日間の旅へ

祖母は勿論母も長旅などしたことはなかったが、わたしは、子どもも大きくなり主人が退職して時間がとれるようになってから、海外の旅に、二人で何回も行かせてもらった。

今一番思い出されるのはヨーロッパへの二十日間の旅である。

「ヨーロッパを廻らないか」の誘いに…

親戚の村松健児さんが東海大学の教授をしていて、たまたまフランス・ナンシーの研究所へ派遣されて行っており、「明さんが退職したのだから、是非一緒にヨーロッパを廻らないか」との誘いがあった。わたしは今まで国内の一泊二泊の小旅行には行っていたものの、二十日間も家を留守にして外国に行くのは初めてであった。

期間は平成元年十二月二十日から平成二年一月十日まで。東京の上野に前泊し、翌二十一日成田空港十二時の便でパリのシャルドゴール空港に向かった。

機内では静かに腰掛けていればスチュワーデス（現在はキャビンアテンダントというらしい）が順に飲み物や美味しいお食事を運んで下さる。モスクワを経由のこの飛行ルートは太陽を追って飛ぶので、モスクワまでの十時間程は外は明るく、雪に覆われたシベリヤの広大な景色を見つつ、隣りに座ったパリへ十日間の旅をするという二人の女子大生と楽しく話し快適に過ごした。シャルドゴール空港へは十三時間程のフライトで到着した。

空港へは健児さんの出迎えを受け、郊外電車で三十分程乗り、パリ東駅前のホテルに落ち着き、